

昨年度の助成対象団体には、具体的な施設やモノを対象とした活動が多かったように感じられる。また、事業化を目指している活動、事業の萌芽が感じられる活動も見られた。これまで事業活動を行うNPOは、高度の技術を持つ専門家集団という印象が強かった。しかし専門家だけで構成されていない団体、専門家が黒子のような存在で組織の前面には現れない団体等が事業のコーディネート役を果たしたり、事業の主体として活動に取り組む事例も見られるようになった。NPO活動を自らの職業としている若者も登場してきた。もちろん、事業化をあまり意識していない活動もあるが、それぞれ独自のスタイルを作り出していこうとする意欲が感じられた。

ここでは、活動している現地に足を運び、そこで団体のメンバーと交わした会話から印象に残った言葉を基に団体の特徴や傾向を探ってみたいと思う。

下市タウンモビリティの会は、花と緑のまちづくりNPOの先駆者「特定非営利活動法人つくばアーバンガーデニング」(1993年、1994年度助成対象団体)のメンバーからハンギングバスケットの製作の指導を受けた。ハンギングバスケットにするのにふさわしい花の選択、色使い等具体的で勉強になることが多かったという。先輩NPOが後輩に技術を伝授したことは、NPOの世界が成熟してきた現れではないだろうか。現在は、空き店舗を活用した多世代交流サロンの開設準備で、本業との兼ね合いが大変だと聞く。今後は保育や福祉等のNPOとの連携が新たな展開を導くだろう。

特定非営利活動法人フローレンスの代表の母親はベビーシッターをしていた。彼は、常日頃から働きながら育児をしている女性のジレンマを見聞きしていた。将来の自分の妻にも同じような悩みを持たせたくないという思いが、病児保育システムの開発、起業へと結びついたという。私が見学に行ったレスキュー隊員の研修では、既に子育てを卒業したベテラン主婦(未来のレスキュー隊員)とフローレンスのコアメンバー(20~30代の未婚者)の間に強力な信頼関係が成立していることが見てとれた。地域での子育てを具体化した好例といえるだろう。

ゲストハウスという大都会でしか考えられない空間については、Tokyo Share Style 研究会のメンバーの両親さえも全然理解してくれないという。だが、海外で見た理想のスペースを日本でも具体化したいと元気に語ってくれた姿が印象的だ。家は家族が住むところという既成概念に挑戦していく柔軟さ、先駆性を持っている。

森のライフスタイル研究所の代表は、環境系のNPOはたくさんあるから、その中で何か特色を出さなければならないと思ったそうだ。それで考えたのがペレットストーブだったという。他のNPOとの差別化を図り、自らのアイデンティティを強調する記憶に残る言葉だった。団体の代表は東京の出身だが、祖父方の田舎ということで活動地域との縁があった。今後は、健康にも良いという側面からペレットストーブを高齢者にPRしていきたいという。

コーポラティブハウス内の共有施設「とねりこの家」ができた当初は、居

---

心地が良すぎてコーポ住民が皆自分の部屋に戻りたがらなかったという。今でも自分の子どもではなく他の家の子どもの面倒を見ることが多いそうで、コーポ住民で大きな一つの家族のようだ。現在、共有施設の開設者が病気療養中であることから、施設の運営について思い悩むことがあるとコーポ住民のメンバーが話してくれた。

これら5団体を振り返り、私が今回大変強く感じたことは、どの団体も独自のスタイルが確立されていた（あるいは確立しようとしていた）ことだ。今やNPOは珍しい存在ではなく、ごく普通の組織のひとつになってきている。だからこそ自らのアイデンティティを確立し、その独自性を明らかにする必要がある。不特定多数の人々を対象として活動するというよりも、活動の意義に賛同する共鳴者を直接の対象として活動を展開する傾向が強いように思われる。

また、施設やモノ、システムなどを具体的にかたちづくることの重要性を学んだ。実際に目にすることができるものを生み出すには、たくさんの知恵や時間が必要になるが、5団体を振り返ってみると、何かをつくりたいと強く願っているときに、新たな人との出会い、新たな発見があるように感じた。強く願う人からは電磁波が発せられているかのように、活動を展開させる人の素質や能力を引き付ける。

人が何かを生み出すということを考える時、学生時代に読んだAlain（アラン）の『芸術論集』の中のフレーズが思い起こされる。「いかなる着想も作品ではないことを、はっきり言っておこう。そしてこの機会にすべての芸術家に忠告しておきたい、単なる可能のうちどれが最も美しかろうなどと捜しあぐむのは時間の浪費というものである。いかなる可能も美しくはなく、ただ現実のもののみが美しいのだから。まず制作せよ、判断はそれからのことだ」。これは、芸術家に向けられた言葉ではある。が、芸術に携わる人だけに向けられているのではなく、広く一般的に示唆に富む言葉であると思う。芸術と人との関係のように、NPOも益々私たちの生活に身近な存在となってきた。事業化に取り組む活動もあれば、今まさに自分たちの理念を追求中の活動もある。さまざまな発展段階、さまざまな形態の活動が存在し、優劣をつけられるものではない。それぞれの活動が明るい未来を見つめ、地域の人々の目線で遂行されたりされようとしている。それぞれが独自のスタイルを確立しようとしている。どれも人の手によってかたちづけられている。人の手がつくりだすものは美しい。そのことに溺れるのは危険であるが、NPOは人が中心であることを改めて実感した。どのような活動にも熱い人の思いが込められている。そのような活動に関わる私たちは、今まで以上に人を愛さなくてはならない。